

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	失われた自己を求めて : 東野圭吾の推理小説と禁断の科学
Author(s)	松本, 舞
Citation	表現技術研究 , 19 : 43 - 68
Issue Date	2024-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/55145
URL	https://doi.org/10.15027/55145
Right	
Relation	



失われた自己を求めて― 東野圭吾の推理小説と禁断の科学

松本 舞

序

世界で唯一の被爆国でありながら、戦後の日本は、原発という技術を発展させてきた。東日本大震災で浮き彫りになったように、その技術の脆さは日本国民が実感することとなった。日本での原発事故の悲惨さを目の当たりにしたドイツは、いち早く原発の稼働を停止した。一方、日本では原発を止める動きはなかなか進まない。

『夢幻花』（二〇一三年発表）と題された作品で、東野圭吾（一九五八年―）は、原子力工学科の博士課程に在籍する大学院生、蒲生蒼太を登場させている。¹⁾

蒼太が入学した頃には、石油燃料に代わって原子力が期待されており、「未来を感じて」この学問を選んだものの、東日本大震災と原発事故によって研究を取り巻く環境は一変した。就職説明会に参加したのちに蒼太は「一番の被害者は俺たちだ。何が夢の核燃料サイクルだ。夢も希望もあつたものじゃない」（八二頁）とい

い、就職難にも陥ったことに対しても愚痴をこぼしている。蒼太は、家族との相性が悪いと感じ、大阪の実家を出て東京で一人暮らし

をしていた。具体的には、警察官の父の真嗣と、年が離れた兄の要介にだけ存在する絆があつて、二人のあいだに自分が入っていないことを長年悩んでいた。

あるとき、蒼太は、兄が身分を偽って、秋山梨乃という女性に接触していることを知る。オリンピック出場を有望視されつつもスランプに陥っている水泳選手の秋山梨乃は、自殺とみられる転落事故で従弟を失い、その直後に、強盗にみせかけた殺人事件で祖父の周治を失っていた。梨乃と知り合いになった蒼太は、兄が、梨乃を通じて黄色い朝顔という花を追及していることを知る。

公務員であるはずの兄が植物とどのような関係にあるのか？ 黄色い朝顔に一体何の秘密があるのか？

周治殺害の詳細を追いながら、蒼太は、かつて七夕の恒例行事として、父に連れられ、母と兄と一緒に台東区入谷で開催される朝顔市に向かっていたことを思い出す。また彼は、中学生時代には、医者の娘の伊達孝美という名の女性と朝顔市で出会い、交際を始めた。だが、蒼太と孝美の交際は、双方の両者の親の知るところとなり、一方的に禁じられたという過去があつた。秋山梨乃と供に周治殺害の事件を追う途中で、中学生以来はじめて伊庭孝美と出くわす。やがて周治殺害の全貌が解明される中で、黄色い朝顔

を追ってはいけない理由と、黄色い朝顔がもたらした悲劇が明らかになる。

朝顔の種は、もともと下剤や利尿剤として使われていたが、なんらかの作用で突然に発生した黄色い朝顔には幻覚作用があることがわかった。幻覚作用が生じることが知れ渡ると裏ビジネスが生まれることを恐れた日本の警察は、黄色い朝顔の種が幻覚作用をもつことを伏せたまま、黄色い朝顔の回収作業を行った。しかし、外科手術が行われるようになった江戸末期には麻酔薬の開発が求められており、幕府は密かに黄色い朝顔の栽培を続けていた。蒼太の曾祖父の蒲生意嗣を含む警察組織は、黄色い朝顔の種の幻覚作用を自白剤として使うことを提案した。こうして、医者が麻酔薬の効果を期待したため、また警察が自白剤の効果を期待したために、江戸幕府から明治政府に政権が変わっても、黄色い朝顔の栽培は秘密裏に行われていた。

黄色い朝顔の種は、医学的にもそして警察組織にも、有効的に利用されていたはずであった。しかしながら、田中和道という人物が何等かの経緯で伊達家から黄色い朝顔の種を持ち出し、薬物によるトリップ状態を楽しんだ後に大量虐殺事件を起こした。その被害者の中には、まだ乳幼児であった、蒼太の実母の志摩子の両親も含まれていた。この事件は水面下で早急に処理され、黄色い朝顔を栽培してその種を自白剤としていたことは、警察の内部秘密になった。自白剤として活用することを提唱した蒲生意嗣は、息子である真嗣に黄色い朝顔を撲滅させるようにと懇願する。そして、蒼太の父と兄は蒲生家の一員として、警察が生み出した悲

劇を二度と起こさないように、朝顔市でアサガオの品種を確認しながら、禁断の植物という負の遺産に対して責任を負っていた。また、田中和道が朝顔の種を持ち出した伊達家の医者たちも、蒲生家と連絡を取りながら、黄色い朝顔を生み出したことに対する責任を負っていた。

秋山梨乃の祖父周治も、黄色い朝顔を巡ったトラブルで被害されたことが分かった。これらの経緯を知った蒼太は、科学技術の発展の影には負の遺産があることを知り、原子力というものを生み出し、その開発に関わってきた研究者として、今後も原子力に関わることを決意する。²⁾

文芸評論家の荒正人（一九一三—一九七九）は、イギリスの推理作家ロナルド・ノックス（一八八八—一九五七）が『一九二八年度傑作短編集』の序文に記した「探偵小説十戒」を基本にして次のように述べている。

探偵小説は、逃避文学（エスケイプ・リテラチュア）の一種である。（略）理想社会を宣伝するユートピア文学を狙ったりしてはいけない。政治小説になることはできない。社会性を採り入れるのはよいが、社会を批判したりすることが目的ではない。

（江戸川乱歩・松本清張共編『推理小説作法』一六八頁）

このような推理小説における法則は、アメリカの推理作家、ヴァン・ダイン（一八八八—一九三九）が一九二八年に発表した「アメ

リカン・マガジン」の中の「探偵小説二十則」にも記された。それ以降、推理小説の作者は、読者が確実に事件の謎を負えるようにすることが求められるようになった。また、一般の読者が推理することが不可能な科学技術を使ったトリックも禁じられており、国際的スパイや政治的犯罪を動機にすべきではない、とも提唱されていた。さらに、登場人物の性格描写などは、読者の推理的興味を妨げぬ程度にとどめるべきという決まりもあつた。³⁾

東野圭吾の推理小説は、これらの法則に則つた、所謂本格ミステリと呼ばれる作品もある。⁴⁾だが、これらの法則をあえて破ることによって、東野は新しい推理小説の形態を模索しているともいえる。一九九六年に発表された『名探偵の掟』と題された短編集の中で、東野は、既存の探偵小説の法則や掟に対するパロディを採り入れ、それを茶化するような描写を行っている。⁵⁾

東野は、東野自身が電気工学科に在籍した学生時代およびデンソーでエンジニアとして働いた際に得た知識を生かし、これまでは一種のタブーとされてきた、科学技術のトリックを用いることもある。また、彼の推理小説には、スパイや政治的犯罪を含む組織が登場し、それが結果的に社会に対する批判になることもある。また、登場人物の性格描写や心理描写が中心に置かれ、恋愛要素が取り入れられることも多い。

これらの新たな試みによって、推理小説の根幹となる「誰がやったのか？」という犯人捜し—即ち「フーダニット」(英語でいうところの Who has done it [the crime]?) や、「なぜ事件が起こったのか？」という動機の描写、さらに「ワイダニット」英語でい

うところの Why has he/she done it?) 「どうやって殺人が起こったか？」というトリック(「ハウダニット」英語でいうところの How has he/she done the crime?) の謎に加え、東野作品の登場人物は、事件の真相に迫る過程で、「自分はいったい何者か？」(Who am I?) と、自己の探求に導かれることになる。そしてその背景には、科学技術に対する人間の挑戦と葛藤、さらには、それを操る闇の組織の存在が見え隠れする。

本論では、東野圭吾の推理小説作品の中で、失われた自己を求める登場人物たちに焦点を当て、彼らが導きだす答えと、そこに隠されている真実を提示することで、作者東野の意図を明らかにすることにした。

一、父とは？ 母とは？ 自分とは？ —『分身』における

生命誕生と自己

東野が一九九三年に発表した『分身』と題された小説の中では、人間の誕生が科学によって操作され、それによって引き起こされた悲劇が描かれている。この作品は、北海道で大学教授の父の元で暮らす氏家鞠子、東京で看護師のシングルマザーと暮らす小林双葉の二人の話が「鞠子の章」と「双葉の章」として、平行して描かれている。

「もしかしたら母に嫌われているんじゃないか」(五頁)という鞠子の語りからこの小説は始まる。鞠子は自分が母に似ていないために母に嫌われているのではないか、と思悩んでいた。い

つも自分に対してよそよそしい母と、何かと言いつくをするような父との三人家族として小学生時代を過ごした鞠子は、中学進学を機に親から離れ寄宿舎で暮らすようになる。中等部一年の年末に鞠子が実家に帰省した際、鞠子の母は鞠子と父に睡眠薬を飲ませて眠らせた後に家に火をつけ、自らも死のうと、一家心中を図る。母は焼死、父は足に後遺症が残るような怪我を負った。鞠子は、母が自殺を図ったと考えていた。その後、母の死の謎は闇に葬られたが、大学進学と同時に、鞠子は父の過去を調べるために、父が大学時代を過ごした東京に向かう。

「双葉の章」は、彼女の大学時代から始まる。東京で大学生活を送る双葉は、高校時代に始めたバンドのヴォーカルとして、二年の夏にオーディション番組に出演することが決まった。このテレビ出演に母の小林志保は猛反対をする。TV出演をめぐっては、双葉が中学三年の時にクイズ番組に出演しようとした時にも、志保に猛反対をされた過去があった。中学時の出演は断念した双葉だが、今回のオーディション番組の出演に際しては、バンド仲間の声もあって、自身の意見を押し切ってテレビでバンド演奏をした。しかし、この番組放送の後に双葉は母の様子がおかしくなったことに気づく。「あたしが人前になると何か悪いことが起きる――まさかとは思うけれど、ママの真剣さを見ているとそれが冗談とは思えなくなってしまう」（三八頁）と双葉は感じる。そして双葉の悪い予感に当たり、オーディション番組放送直後に、志保は轢き逃げの被害に遭い、死んでしまう。

作者の東野は、二つの謎を仕掛ける。鞠子の母が、自分に似て

いない娘を見るたびに思い詰めていたのはなぜか？ 双葉が公の場に顔を出すことをかたく拒否したのはなぜか？ そして、その謎に迫るために、一歳の年齢差の鞠子と若葉それぞれが、母の死の謎に迫ろうとする。鞠子にとつては「ワイダニット」みたいな母が（自殺という形で）死を選んだのか。双葉にとつては「フーダニット」いったい誰が母を殺したのか。

作品の中盤で、双葉の母、小林志保の轢き逃げに、鞠子の父、氏家清がかかわっていることが読者に知らされる。また、東京の双葉の友人に接触している謎の男が、足のひきずりかたからして、北海道在住の氏家清であろうことも想起せられる。発生物学を研究する氏家清を通して、鞠子と双葉の二人に何らかの関係があることが提示され、様々な謎をとく鍵が示されていく。

鞠子自身が母に似ていなかったという事実は、鞠子の出生の秘密とともに明らかにされていく。一方で、双葉もまた、母の轢き逃げの真相に迫ると同時に、自身の出生の真相に近づいていく。二人の顔がそっくりであることが物語の中盤から示されるが、「似ている」というよりも、「同一人物としか思えない」と周りの人々は反応をする。

やがて、この二人がお互いに会おうと試みると同時に、鞠子の父が秘密裏に行った実験とその結果が明らかになる。彼女たちは、氏家清が大学時代に叶わぬ恋をした女性、高城（旧姓阿部）晶子のクローンを作ったのである。⁶氏家清は、一研究者として、人間のクローンを作ったという禁断の領域を犯す野望に狂っていたと回顧している。さらに、研究チームの中でも氏家清にいたっ

ては、自分の片思いの相手の分身を自身の娘として手に入れたい、という野望が潜んでいたことも、後に告白している。

晶子は高城康之という男性と結婚する。高城は、結婚後に、ハンチントン舞踏病という難病が発覚し、その病気が遺伝することを恐れた高城夫妻は子どもをつくることを一度は断念する。彼らの共通の知人であった氏家清が発生学の研究をしていたため、高城夫妻は体外受精によって子をもうけようとする。日本の医学界において、体外受精における他人の精子の使用は認められていなかったため、夫の精子で体外受精を行い、夫からの遺伝の元をたちきるといふ手法を氏家清は提案した。受精後に染色体から父親の分を取り除き母親の分を二倍にするという特殊な治療を行うという。そのことによって康之から子にハンチントン舞踏病が遺伝することはなくなる。やがて、氏家清の手術によって晶子は子を宿すが、流産し、高城夫妻は子どもを作ることがを自体を断念し、出版社の跡取り息子として養子を迎えるという選択肢をとる。

実はこの時に晶子の子宮に着床した卵子は、晶子の卵子そのものの細胞を分裂させたものであった。氏家清は、それまで公には禁じられていた、哺乳類のクローン実験を行ったのである。晶子が妊娠を断念したあとにも、氏家清のもとには、冷凍保存された晶子の卵子が数個残っていた。その後、氏家清のもとで助手として働いていた双葉の母、小林志保がその卵子の一つを自身に着床させることを申し出たのである。クローンの人間を作ることで自身が倫理上問題視されることは実験チームにも判断できたことであり、志保は子を中絶する予定であった。しかし中絶前に志保は行

方をくまらず。やがて志保は子を産み、シングルマザーとして双葉を育てるといふ経緯にいたる。

冷凍されてもう一つ残っていた晶子の卵子は、志保の子宮に着床して一年後に解凍され、鞠子の母の子宮に着床させられた。ごく一般的な不妊治療を行ったと信じていた鞠子の母は、生まれてきた鞠子が全く自分に似ないことに悩み、夫の清が持っていた学生時代の晶子の写真を見たときに、自分の娘が高城晶子の生きたものであることを知る。クローンの知識がなかった鞠子の母は、不妊治療の結果として宿した自身の娘が夫と晶子の子であると勘違いしてしまう。彼女は、自身の娘であるはずの鞠子が夫の裏切りの結果として存在することに苦悩を覚えてしまうのである。

双葉の母、小林志保は、自身が産んだ娘である双葉が、氏家清たちのクローン実験の結果として存在することを知らながら、その存在を必死に隠そうとする。そもそも志保は、夫が外で働き、妻が子を産み育てるといふ家族間の男女の役割に疑問を呈し、それを覆すべく研究を行っていた。志保がクローン実験に陰ながら協力したのは、凍結させていた晶子の受精卵を自らの子宮に着床させ、クローンの子を作成した後はその子を堕胎するという計画に協力することによって、従来の男女の役割を否定することができると考えたからであった。女性の母性そのものを否定する実験に志保自身が申し出たものの、実際に子を宿していく過程で、志保に母性が生まれる。そして、堕胎手術から逃れるために行方をくらませ、氏家清のチームからは身を隠すように生活をしていった。

この作品の中では、夫の遺伝子を残さずに子を宿そうとした高

城晶子、人工授精で子を産もうとした鞠子の母、そして、クローン実験の実験台となった双葉の母の三人の女性それぞれの苦悩と葛藤が描かれる。鞠子の母は自ら死を選ぶ。双葉の母は娘の双葉の存在が明らかになった時点から自らの運命を予測し、最終的には轢き逃げによって死に至る。高城晶子は、双葉のテレビ出演後に自身のクローンの存在を知り、養子に迎えた脇坂に双葉と接触をさせる。やがて晶子は双葉と対面し、その姿が自らの若い時そのものであることにショックを受ける。この三人の女性たちは、それぞれ、妊娠・出産という過程において、氏家清のチームが行ったクローン実験がもたらした悲惨な運命をたどることとなる。

クローン技術で生み出された鞠子と双葉の二人は、政府関係者の陰謀に利用されようとしていた。クローン実験が明らかになったのは、双葉のテレビ出演がきっかけではあるが、政府関係者たちは、大物政治家である伊原俊策の白血病の治療のために伊原に適合する骨髄を必死になつて探していた。伊原の病を治療しようとする医師たちは、伊原のクローンをつくることで伊原に適合する骨髄を採取しようとした。伊原は息子をクローンで設けていたが、実験は失敗し、その息子は幼くしてなくなっていた。伊原が再度発病したため、その病気の治療のために伊原のクローンをもう一度作るうとする政府の陰謀で、鞠子と双葉の卵子に白羽の矢が立った。

双葉の友人や、鞠子の調査を助けていた女性研究者を介して、双葉と鞠子はお互いが酷似した風貌を持つことを知り、北海道で対面しようとする。だが、それが叶う直前に鞠子は闇の組織にと

らえられ、北海道の研究所の中に監禁される。氏家清も実験の責任者として鞠子とは別室に監禁されていたが、隙をみて娘の愛読書『赤毛のアン』の文庫本のカバーに手紙を書く。そして氏家清が行った過去の実験と鞠子の誕生についてのすべてを明かし、鞠子と鞠子の母に懺悔する言葉を紡ぎ、さらに、鞠子が監禁されている施設から脱出するように忠告をする。そのころ双葉も、クローン実験によって誕生させられた二人が政治家に利用されているという真相に気づき、あてもないまま、鞠子の監禁場所を探そうと北海道をさまよう。

鞠子も双葉も、自身の生い立ちを知り衝撃を受けると同時に、自分たちは単なる実験結果にすぎないことを痛感させられる。双葉は自分の母親は死んだ志保しかいないと自身にも言い聞かせるが、自身がクローン動物であるという事実から逃れることができず、ない。

さらに、双葉と鞠子を苦しめたのは、「私とは何か」という問いに対して、自身を見出せない苦悩である。鞠子は、コピーではない自身というものが、オリジナルである高城晶子の分身であると考え、一方で、親子や双子といった通常の血のつながりを持っていないことに悲観して、次のように考えている。

私とは何か、分身という言葉が大層にとらえず、もっと気軽に受け止めてみようとなつて努力してみた。酷似した母子だとか姉妹だとか双子の片割れだとかと、同じようなものと思ひこもうとしたのだ。しかしどんなに好意的に解釈しても、それら

とは根本的な違いがあった。それらはいずれも個々の目的を持ってこの世に生まれてきたものであり、その結果として、たまたま「分身的」であつたにすぎないのだ。初めから、「分身」として生まれてきたのではない。
〔「分身」三五六頁〕

鞠子自らが、父がかつて愛した高城晶子のクローンという「分身」だからこそ父に愛され、それゆえに母が自ら死を選んだという事実を受け入れたとき、鞠子は、自分が「分身」以外の何物でもない、と考えるようになる。「クローンとして生まれてきた人間の辛さ」(四三四頁)をかみしめながら、クローンという存在である以上、確固たる自己を持つことはできないと鞠子は考え、次のように結論づけている。

いろいろ考えた末、結局私はこうしているしかないのだなという結論に落ち着いてしまった。前にも行けず、後ろにも行けない。その理由は、たぶんこれが私の運命だからだろうと私は思った。十八年前、クローン技術によつて私という実験品が作り出されたのは、現在このような日を迎えるためだったのだ。だから私には、この運命に逆らうことなどできない。実験用に飼われているマウスが、実験に使用されることなく、自然のもとに帰されるなんてことがないように。(略) 自分自身の中に、おそろしく冷静な私がいて、「実験動物なんだから仕方ないじゃないか」と耳元に絶えず囁きかけてくるのだ。そして何度目かの確認をした。私はこの世に生まれてくるべき

じゃなかったんだー。

〔「分身」四三四―四三五頁〕

鞠子にとつての「ワイダニット」の謎も、また、双葉にとつての「フーダニット」の謎も、禁断の領域に踏み込んだ、人間のクローン実験という科学技術によつて明らかにされる。そして、技術を利用してしようとする政府関係者によつて、また新たな過ちが犯されようとしている。東野は科学技術の過ちによつて、その実験台にさせられた人々が自己を失うという悲劇とともに、人間が犯してはならない領域の問題を提示しており、そこにはそれを悪用する政府関係者にたいする批判も込められている。

二、「見えない糸」が操るもの―『宿命』における運命の

謎と自己

『分身』の中ではクローン実験がもたらした結果が描かれていたが、『宿命』(一九九〇年発表)の中でも、研究に没頭した研究者たちが人体実験を行い、その結果うまれてしまった悲劇と運命が描かれている。ここでの人体実験は、禁断とされていた脳の実験である。

この作品は、夫の父親を亡くし、遺産相続の混乱の中で殺人事件に関わらざるを得なくなった、瓜生(旧姓江島)美佐子の視点と、その殺人事件を追う警官、和倉勇作の視点が交互に描かれていく。美佐子は、自身の父の江島壮介の入院以降、見えない糸のような

ものに自身の人生が操られているように感じるようになる。決して経済的に恵まれているとは言えない家庭で、壮介の手術以降、「何かがおかしいのではないか、と思い」だす（三四頁）。壮介は地元最大の企業であるUR電産という企業に四十歳を過ぎて再就職し、美佐子自身もその会社に就職が決まる。しかも、役員室付きの人事担当に起用され、当時の女子の就職先としては話がうますぎると美佐子は感じる。さらに、社長の瓜生直明から、息子で医師の瓜生晃彦を紹介され、見合いのような形で結婚をする。不満があるわけではないが、晃彦には何か秘密があると感じている美佐子は、その正体と、自身の身の上を関連付けるようになる。

晃彦の祖父が起業したUR電産の役員の須貝正清が殺され、その捜査に和倉勇作が命じられる。ボウガンの矢の毒によって須貝は中毒死したとみられていた。瓜生直明の遺品のひとつであるボウガンが使われたため、遺品の分配のために集められた身内のみならず犯人像が絞られる。

ここでは、ボウガンの毒矢という凶器が見つかったため、この作品では「フーダニット」と「ワイドニット」がテーマとなる。

得体のしれない何かによって、順風満帆と呼べる人生を送っていた美佐子とは対照的に、警察官の和倉勇作の人生は、得体のしれない何かによって、ことごとくつぶされていく。勇作は大学受験当日に父が脳梗塞で倒れたために受験を断念し、経済的な問題を含んだ様々な問題を抱える中で美佐子との交際も断念した。その美佐子が後に婚姻関係を結んでいる瓜生晃彦は、勇作の根っからのライバルであり、宿敵でもあった。

勇作と晃彦の最初の出会いは、「レンガ病院」と呼ばれた脳神経外科病棟の駐車場であった。勇作が慕っていたサナエという女性が亡くなった病院である。ここで、洒落た格好をした男の子に勇作はにらみつけられる。少年は運転手つきの車にのって去っていく。その情景は、「二枚の写真のように、勇作の脳裏に強くやきつけられ」た（一三頁）。この、レンガ病院で出会った少年こそが瓜生晃彦であり、勇作は晃彦と小学校で再会する。何かにつけて晃彦をライバル視した勇作だが、受験を断念したのちに、父と同じ警察官の道を選ぶ。一方で、晃彦は、UR電産の跡取りにはならず、勇作の志願していた大学と同じ統和医科大の脳医学の道へと進む。度重なる挫折の中で、勇作の晃彦へのライバル心は、やがて時とともに萎えてしまう。

その勇作が、須貝殺しの殺人事件の捜査で美佐子と再会する。そして、かつて愛した美佐子が、かつて激しくライバル心を燃やした瓜生明彦の妻になっているという事実を突きつけられる。美佐子と勇作の出会いもレンガ病院であった。かつて美佐子の父がレンガ病院に入院しており、そこに見舞いに来ていた美佐子と勇作は言葉を交わすようになる。美佐子が自身は「見えない糸に操られている」（二五九頁）という話をきき、勇作もまた、レンガ病院という場所ですれ違った晃彦とも奇妙な縁で結ばれているのではないか、と思い始める。勇作は、レンガ病院で死んだサナエの死後も度々レンガ病院に足を運んでいた。警察官の父がサナエの死を不審死とみなし、独自で捜査していたためである。瓜生家の机の中に、レンガ病院が映された写真を見つけた勇作は、度重なる

偶然の根源はレンガ病院にあるのではないかと推測をする。

勇作は、かつて一度も勝つことができなかった晃彦を須貝殺しの被疑者とみなし、警察官として、再度、晃彦に勝負を挑むことになる。その過程で、「電脳式心動操作法」というファイルが瓜生家に嚴重に保管されており、そのファイルに記されている内容をどうやら瓜生家の人々が守っていることを勇作は知る。瓜生家の内部に立ち入ることができる美佐子にそのファイルを確認してもらおうよう勇作は頼むが、本来立ち入り禁止にされている書齋に入った美佐子は晃彦に見つかってしまい、勇作から渡されたレンガ事件の資料も晃彦に奪われてしまう。美佐子は「電脳式心動操作法」のファイルの存在が、彼女自身が感じている「糸」であるのではないかと、と勇作に報告をする。

殺人事件は、UR電産内部の対立関係が引き起こしたものであったという結果になった。最終的には晃彦は殺人事件の犯人ではなかったことが判明する。事件は表向きには解決するが、勇作は「ワイドニット」の謎が解明されたとは考えていなかった。そして、瓜生家に受け継がれているファイルにその答えを探ろうとする。殺人事件当時のアリバイが偽のものであることを勇作に見抜かれた晃彦は、美佐子と勇作がかつて愛し合っていたことも知り、すべてを話すことを決意する。

瓜生晃彦が語るには、瓜生工業の社長である祖父、瓜生和晃は戦時中に武器の微小精密部品を製造していた。瓜生氏と繋がりがあつた政府関係者が、レンガ病院とよばれていた上原脳神経外科医院の研究成果のレポートを持っており、脳の中に微小部品を埋

め込むことができるかと相談を持ち掛けてきたという。この政府関係者は、脳にはめ込んだ微小部品に外部から電波を送ることで人の感情を操作し、すべての人間を軍事スパイにすることが可能になるのではないかと考えたらしい。²⁾

晃彦の「祖父はそのアイデアに乗った。科学の力で人間を操作するという幻想にとりつかれた」(三五四頁)と晃彦は語っている。それが「電脳式心動操作法の研究」であり、そのためには人体実験が必要であつた。政府に記録は残っておらず、一企業が独断で極秘に行つた研究という形ではあるが、政府関係者が、世界と戦うための武器としてこの機器を作るように命じたということになる。この実験で、感情を支配する神経を電気刺激し、本人の意思や感情をコントロールすることには成功したが、当初の上原レポートの成果として示された、特定の音に対して特定の反応を示すという例を作り出すことには失敗していた。人間をスパイ化させるためには、命令の音に常に従うという状況を作り出さなければならず、実験が長期化していた。そのうちに、人体実験のために集められた七人の貧しい若者のうち四人が逃亡し、その中に美佐子の父、江島壮介も含まれていた。壮介は実験途中で逃亡したため、脳に機械が埋め込まれたままであつたが、逃亡後しばらくは何の異常もない状態で生活を送っていた。後に壮介は仕事上の事故に遭い、頭部を怪我したことによってとある病院に運びこまれた。そこでかつて実験に携わつた関係者である医師が、壮介の頭の傷が昔の実験の跡として残っていることに気づく。そして壮介はレンガ病院に運ばれ、そこで秘密裏に治療を受けることとなる。他

の被験者たちがどのような運命をたどったかは明らかにされていないが、逃亡しなかった三人には実験が続けられた。被験者たちが敏感に反応する条件が確認されたことで実験は終了し、被験者たちの脳はもとに戻された。しかし一度刺激をした脳は完全に元の状態に戻ることはなく、三人のうちの二人が死亡した。残りの一人の女性は、命は助かったが知能レベルが低下することとなった。それが、勇作が慕っていたレンガ病院のサナエであった。サナエは知能程度が下がる前に妊娠しており、やがて双子の男の赤ちゃんを産んだ。サナエの精神状態では子育てができないと判断され、双子は瓜生家と和倉家に引き取られ、瓜生晃彦と和倉勇作として育てられた。勇作がサナエを慕っていたのも、親と子の繋がりがあったためであり、勇作が晃彦に異常なまでの何かを感じたのも、この二人が双子であったためである、という謎解きが読者に明かされる。これが、美佐子がいうところの「見えない糸」であり、すべては脳の実験の研究が生み出したものであった。「フリーダニット」が解決した後の、「ワイダニット」という謎が、美佐子と勇作、晃彦をつなぐ関係を伴い、過去の科学実験結果によって解かれることとなる。

人体実験の被験者に死者がでたこともあって、「電脳式心動操作法の研究」は凍結した。その後、研究を発案した上原医師と晃彦の祖父の二人で実験のファイルを厳重に保管した。この人体実験に関わった技師の一人に、瓜生の会社に勤める須貝の先祖がおり、殺された須貝は、ファイルを手にすることによって、実験で逃亡した者に接触しようとしていたのではないかと、晃彦は考えてい

る。晃彦によれば、実験の途中で逃亡した四人のうちのリーダー格の男が、現在の有力な政党の派閥の参謀となっていた。この男の脳に感情操作の回路が埋め込まれたまままだという事実を利用してようとした須貝と、実験を封印しようとした瓜生とのあいだで意見が対立したのだろう。この殺人事件は、UR産業内の瓜生派と須貝派の派閥争いが原因であると公表されたが、実際は、この人体実験を巡った意見の対立であった。

殺人事件の捜査の際に、和倉勇作は、瓜生直明の書庫の中で「科学文明への警告」といったタイトルの本（一六〇頁）という書籍を見つける。「現代的なテーマだと思ったが、書かれたのは四十年以上も前だった。人間はいつも同じ問題を抱え続けてきたのだな」と再認識した」と、作者の東野は表現している。科学文明を作り出す人間が、研究そのものの誘惑に勝てずに妄信的になったとき、科学文明は一種の凶器となってしまう。瓜生家の人々は、科学に倫理が伴わなかったことの責任を何十年も背負ってきた。美佐子が晃彦と初デートをしたときの次のような晃彦の言葉も、科学文明への警告として読むことができる。

「医者と企業は敵同士です。…企業は人間の肉体には関心が無い。それを無視しながら栄えていくのです。医者はその尻ぬぐいを必死の思いでやっています。ブルドーザーで踏みつぶされた苗を、一本一本植え直していくようなものです。…でも本当に一番怖いのは、ブルドーザーよりも農薬なんですよね。形だけでなく、地形そのものを変えてしまう。どんなに力と

財力がある者でも、手をだしてはいけないエリアというものがあるのです」
〔『宿命』二十一―二十三頁〕

瓜生晃彦は、自身がUR産業の後継ぎとならずに医者になった理由とあわせてこのように述べているが、ここで晃彦がいう「ブルドーザー」は、一般的な科学を、そして「農業」は電脳式心動操作法の研究のような、ある意味人間が踏み込むべきでない領域の研究を示唆していると考えることができる。科学という土俵において、決して「形だけではなく、地形そのものを変えて」はならないということが、人体実験という禁断の領域に手をだしてしまった瓜生一家の戒めとして受け継がれていることを著者の東野は提示している。⁸⁾

三、「違和感」の謎

― 『パラレルワールド・ラブストーリー』における自己と記憶

『宿命』の中では、戦時中の混乱の中で、感情の操作を行うために脳の人体実験が行われた、という設定を東野は用いた。先にみたように、その実験がのちにもたらす、いわば宿命のようなものが物語の中心に置かれている。それから五年後の一九九五年に、東野は『パラレルワールド・ラブストーリー』と題された作品を発表している。この作品で東野は、感情だけではなく記憶をも医学によって改変できるか、という試みに踏み込んでいる。そして、

『宿命』のように過去の実験の結果がもたらすものではなく、実験に没頭する若手研究者が直面する問題を取り上げている。この作品においてもまた、記憶を求めながら自己を探索する登場人物の葛藤が描き出されている。

この作品は、研究員の敦賀崇史の視点で二つの世界が描かれる。一つの世界（便宜上、以降、世界1と表記する）では、崇史はM A C 技科専門学校に通いながら、視聴覚認識システムを研究している。彼の実験は、視神経や聴覚神経を直接刺激することで仮想現実を作り出すことを試みるというものであった。中学のころから大学院までともに過ごした、親友の三輪智彦は記憶パッケージ研究班に所属し、ともに時期型リアリティ（脳に直接信号をインプットして、その人の頭の中につくる仮想現実世界のこと）の研究を行っていた。智彦は脳の信号系統などを解明して、パラレルワールドをつくろうと試みている。

もう一つの世界（便宜上、以降、世界2と表記する）では、崇史は、M A C を作った企業である、バイテック社という会社でリアリティシステム開発部に所属し、チンパンジーの実験を行っている。チンパンジーに視聴覚情報を直接入力することが研究テーマとなっていた。崇史はM A C の二年間にこの研究の基礎を勉強しており、その研究を継続していくものと思っていたが、実際に与えられたテーマは空想に関するものであった。人間が空想するときの脳の状態をコンピュータで解析し、最終的には空想している内容を外部からコントロールするということを目標にしている。この研究のために、チンパンジーを実験台としていた。あるとき、知人と

の会話の中で、崇史は、親友の三輪智彦の近況を尋ねられ、違和感を覚える。親友のことを思い出さないこと自体が不自然であり、また、同棲中の恋人、津野真由子との出会いについても曖昧な記憶しかないことに崇史は徐々に不信感をいだいていく。

この作品は、世界1と世界2が交互に描かれており、それぞれの世界で時間が経過していく。世界1では、足に障害を負う智彦と中学時代から研究仲間として親しくしてきた崇史は、智彦に恋人ができたことを純粹に喜ぶ。しかし、真由子を智彦の恋人として紹介されたとき、智彦の恋人が、自分が電車から見つめて密に恋をしていたまさにその女性であることに気づきショックを受ける。崇史は、修士課程在学の頃、大学に行く際に乗った電車の中で、別の路線を走る電車に乗っていた真由子をいつもガラス越しに見つめていた。真由子も崇史を見つめているという自覚があったが、二人が直接会うことはなかった。真由子はそのことに気づいているか分からないままであったが、崇史は智彦との友情と真由子への愛の両方を捨てきれずに苦しむ。

世界2における崇史の葛藤は、度々現れる違和感である。この作品は序章に加えて十章で構成されており、「違和感」「胸騒ぎ」「喪失」「矛盾」「混乱」「自覚」「形跡」「証拠」「覚醒」「帰還」とそれぞれの章の題が付されている。これらの題は、世界2の崇史の思考の変化となって表現されている。

作品を読み進めていくと、この二つの世界に時間差が生じていることに読者は気づかされる。世界1は崇史と智彦がM A Cで教育を受けながら研究をし、卒業を迎える。世界2では崇史はM A

C卒業後にバイトックに入社しており、智彦はバイトックのアメリカ本社に赴任した事になっている。時間が異なる二つの世界なのだから、崇史を取り巻く環境や人間関係が変わっていてもおかしくないのだが、平行するかのような時間の歩みの中で、世界2が世界1とは連続していないこと―世界1の未来として、世界2の出来事が不自然であること―が様々な仕掛けによって提示される。

後に明かされることになるが、世界2は、とある実験によって作り出された仮想現実がベースになっている。その実験のシステムは、世界1で三輪智彦が中心となって作り出したものであった。

世界1の終盤、智彦は、真由子の気持ちで自分ではなく、崇史に向いていること、さらには真由子と崇史がすでに肉体的関係を持ったことを知り、深く傷つく。真由子とは恋愛関係ではなく、単なる友達であったように思いこむために、智彦自身が作り出した装置を使って、記憶を変えようと試みる。

智彦の実験によれば、人間は、「意識的あるいは無意識的の願望から生まれる空想が記憶に影響を与え」（四二二頁）ているという。これは特別なことではなく、人は自己防衛本能を持っているために、「自分が受け入れやすい形に、無意識のうちに加工している」（四二三頁）。多少の誇張を加えながら人に話をする、後から自分が作り出したイメージが確かな記憶として定着していくという事例をもとに、智彦たちは機械を使って人為的に人間の記憶を操作することを試みていた。この記憶改変の実験は、智彦の研究助手の篠崎五郎を実験台に進んでいるかのように報告されていた。

智彦自身、親友である崇史に真由子という恋人を奪われた記憶を消し去り、新たな気持ちで新しい仕事につきたいと願う。智彦は、「記憶は時には人を縛るものなんだよ。今、僕を苦しめているのは記憶なんだ。それを取り除いてほしい」(四一六頁)といい、篠崎を実験台にした機械を使って記憶を改変してもらえるように崇史に懇願する。実は、成功したかのように見えていた篠崎の記憶改変は、かなりの危険を伴い、篠崎は昏睡状態に陥っていた。世界1では、篠崎の人体と思われるものが入った段ボールを研究員たちが夜中に密かにどこかへ運び込んでいる様子が描写されている。智彦は、篠崎に施したものと同じ方法を崇史に教え、同じ失敗をするように密かに計画をしていた。智彦は脳機能に異常をきたし、スリープ状態となった。永久に眠りから覚めない、即ち死の状態になることを自ら選んだ。

世界2では、崇史は様々な記憶に微妙な違和感を覚えながら、智彦はいつたどこに行つたのか?なぜ失踪したのか?本当は会社で殺されたのではないか?という問いを抱え続ける。そして、その問いは最終的には、脳の実験及び記憶の改変という科学によって解明される。崇史は、実は智彦の記憶を改変させる際にエラーを生じさせ、智彦を永遠の眠りにつかせてしまった、という事実を思い出し、自身に行つた記憶改変の実験の内容を含め、以前の記憶をすべて取り戻す。ある種の「違和感」として生じた「フーダニット」及び「ワイダニット」という問いは、人工的に記憶を改変させようという、ある意味で禁断の科学によって提起され、またその技術によって解決されることとなる。しかしながらその

技術は、その開発に関わつた者たちを救うことができず、彼らの自己を崩壊させてしまう。⁹⁾

四、自己を形成するものとは? — 『変身』における脳と自己形成

東野が一九九三年に発表した『変身』では、成瀬純一という青年が脳移植手術を行い、自分の中で別の人格が形成されていくことに戸惑う様子が描かれている。¹⁰⁾

画家を夢見つつも平凡な生活を送っていた純一は「平凡に、目立たずに」(三二二頁)ということが自分自身に一番ふさわしいと自覚していた。純一は、画材ショップで働いていた葉村恵という女性と出会い、交際を始めるようになる。

ある日、純一は、近所の不動産屋に入った際に強盗に遭遇し、居合わせた少女を助けようとした際に銃で撃たれてしまう。銃で頭を撃たれたのち、純一は世界初の脳の移植手術を受ける。治療にあつた堂元という医師の治療観察のメモである「堂元ノート」と成瀬純一の一人称の語り、不動産会社強盗殺人事件の担当刑事である倉田謙三のメモ、純一の恋人の葉村恵の日記によつてこの小説が展開していく。

純一は、脳手術の成功の後、昏睡状態から意識を取り戻す。術後すぐの純一は「自分が誰なのか、一瞬わからなくなった。間もなく記憶が蘇り、僕は自分自身についてのことを思い出したが、

同時に奇妙な感覚があった。昨日までの自分と、感性ががらりと変わってしまったように思えたのだ」(四二―四三頁)と言っている。鏡に映る自分にすら違和感を覚え、飲み物を求めて病室から出た純一は、施設内のある冷蔵庫の中に人間の脳が保管されていることに気づく。『ホストJN』とラベルに記されているものが自分の脳ではないかと疑問をいだく。そして、そうであれば、純一の頭にはいつているものは違う人間の脳であるということになることを知る。純一は、自身の中に生じる違和感が日々大きくなっていくことに気づく。今まで何度も没頭して観ていた映画を面白くないと感じたり、職場でのぬるま湯体質に嫌気がさしたりする、その感情の変化に純一は戸惑う。ひどいことに、彼はこれらの感情を抑えることが困難になり、同僚と殴り合いの喧嘩をしたり、親に甘やかされている学生をあと一步で殺そうになったりする。

僕の中の何かが変わり始めている。今の僕は、明らかに以前の僕ではない。

今の僕は一体誰なのだ？

『変身』二二八―二二九頁

純一は、自らの異変が、移植された脳によるものではないかという疑問を持つようになる。

彼の変化は、彼が描くスケッチのタッチが変わるといような、芸術に関する感覚の変化にも顕著に表れていた。純一は手術を行った堂元博士に自身が変化していることに戸惑っていると話す。それは一種の「心境の変化」(一三六頁)と堂元は説明するが、堂元

自身、純一の変化は脳移植によってもたらされたものであると認識して「成瀬純一は変身の途中である。」(一三八頁)というメモを残している。

恵との関係も少しずつ変わりつつあった。純一は、恵とのデートで、彼女の態度にいらいらしたり、恵の「ソバカスがなければいいのに」(九十七頁)とこれまでに考えたこともないことを思ったりする。恵の話が「幼稚な論理。退屈で浅薄。聞いているのが苦痛になる。しかしその苦痛を無視するように努めた。恵を愛する気持ちもなくしてはならない」(一四五頁)とまで考えるようになる。

不動産屋で命を救った少女、嵯峨典子の両親から純一は食事の接待を受け、堂元の助手の橘直子と同席する。典子が弾くピアノの音の微妙なずれを感じてそれを指摘し、音楽の話題になった際に、純一を撃った強盗が音楽家志望であったこと、その男が京極瞬介という名であることを典子の父親から知らされる。京極が音楽家志望であったことと、自身が音楽に敏感になったことをどうしても結びつけてしまう純一は、「ドナーは関谷時雄ではなく京極瞬介ではないかと考えることが、それほど突飛だとは思えない。もはやそれ以外の説明こそが不自然ではないか。それ以外のどういことが原因で、今まで音楽に無関心だった男の音感が、突然よくなったたりするというのだ。」(二三二頁)と葛藤している。自身に生じる違和感にさいなまれた彼は、不動産強盗事件の担当であった倉田刑事から京極についての情報を聞き出し、ひとり残された京極の双子の妹の存在を知る。純一は、ドナーだと説明され

た関谷時雄という名の大学生の父親にすでに会いに行っていたが、関谷の父親に会ってもなにも感じるものはなかった。一方で、京極の双子の妹の亮子に会ったときに直感のようなものを感じる。亮子のほうもまたそれを感じており純一は「彼女もまた感じているのだ。俺の頭の中から彼女の双子の兄が呼びかけているのを」(二四二―二四三頁)といている。

純一に京極亮子と会ったことを報告された堂元は、ドナーが京極瞬介であることを認めた。そして脳が移植できる確率とされる十万分の一の奇跡が起こったため、犯罪者の脳を移植することの倫理については全く考えなかったと自白した上で、堂元のチームが手術に踏み切ったのは、外的要因もあったという。

「脳移植プロジェクトには、それをバックアップする、ある大きな力が存在する。その筋から、是非移植を実施するようにという指示が出されたのだ」

「政府関係者か」

「そう思ってもらっても差し支えない。この機会を逃すなどいうのが、その方面からの指示だった。犯罪者である京極の死体は司法解剖に回されることになっているが、実際には脳の摘出手術と同時に司法解剖も行われた。もちろんそんな記録はどこを探しても残っていない。そうしたことができたのも、この裏の力が存在したからだ」

〔変身〕二五九頁

つまり、脳移植手術の可能性を確かめるために、技術を一刻も早

く完成させることが堂元たちに命じられていた。医学の進歩で肉体は若くなれども、脳の老化はどうしようもないことを悩んだ政治家たちが、人間の尊厳を失われることを恐れ、脳移植に望みを託していると堂元は説明する。堂元は、すでに精神的に病んでいると判明していた京極の脳を純一に移植し、その後治療を施そうと考えていた。純一は、京極に脳を支配され、人を殺したくなるような衝動にも駆られることを堂元に伝え、堂元の頬を殴る。「僕は少し痛みが残る拳を見つめながら、奴を殴ったのは成瀬純一なのか、それとも京極瞬介なのかを考えていた」(二六二頁)と語る。

純一は手術前の職場を離れ、恵との交際もやめ、橘直子を愛するようになっていた。直子は自身を救ってくれる味方だと純一は信じていたが、直子は堂元に命じられて純一の様子を観察したり、純一の記事のコピーを入手して堂元に純一の情報を送ったりというスパイ行為をしていた。そのことを知っていた純一は、直子に裏切られたと感じ、直子の首を絞めて殺害。さらにはバラバラ死体として山中に遺棄する。¹⁾

橘直子を殺したのは成瀬純一である。しかし、成瀬純一とはいったい誰なのか？ 東野がこの作品で提示する「フーダニット」というテーマは、成瀬純一という人物の自己を掘り下げるものとなっている。脳の一部が京極に支配されていると感じている純一は、脳こそが自己形成するのではないかと考えるようになる。そして、京極としての自分と成瀬純一としての自分の間で葛藤する

やがて純一は、橘尚子殺しの被疑者として指名手配され、恵が借りたウィークリーマンシヨンの一室に籠城する。自らが捕まる

ことを覚悟するも、事件の報道に事実と反することがニュースで報道されていることを知り、何等かの権力によって自身が抹消されようとしていることを察する。純一の脳移植手術は成功したことが世間に発表されていたが、そのドナーが殺人者であることは隠されていた。純一が橘尚子の殺人犯となると、脳移植手術そのものが問題視されてしまう危険性がある。そのために「脳移植手術の研究を順調に推し進めたい人間」たちが純一の「犯行を躍起になって揉み消しにかかっている」（三五六頁）と純一は恵に告げる。その後、実際に「事故に見せかけて殺すようにいわれている」（二六六頁）という男が純一の立てこもる部屋に侵入し、彼は殺されそうになる。そのときに京極の人格が現れ、自身を殺そうとする男たちに火をつける。脳移植という科学技術によって「変身」させられたように見えた純一だが、恵までを殺そうとしたとき、次のように自己を取り戻す。

ガラスに映った俺はじつとこちらを見ていた。

あの目ではなかった。死んだ魚の目ではない。これは紛れもなく成瀬純一の目だ。

死んではいけない。消えてはいけないのだ。たとえ京極瞬介に支配されたかのように見えても、成瀬純一は意識下に潜んでいて、いつも俺をみているのだ。成瀬純一は、すぐそこにいる。

〔変身〕三七六頁

自身を取り戻そうとした純一は、警察官から奪った銃で右の脳を

撃ち、頭の右側を破裂させた。再度の脳移植手術は行われず、純一は植物状態となる。¹²⁾

科学技術によって「変身」させられたように見えた純一だが、京極俊介に支配されるのを拒みながらも、カンバスに向かっている時に絵を描くことによって、一時的ではあるが、京極の脳の支配から逃れることに成功したように思われる。恵を描くことに全精力を向けた純一は「何か月かぶりで味わう創作欲だった。なぜこのような変化が生じたのかは不明だった（略）」もしかしたら俺の中にわずかに残っている成瀬純一の部分が、消え去る前の最後のきらめきを見せているのかもしれない。そうだとしたら、この絵を描くことは成瀬純一として生きていくことの証になる」（二六一頁）と語っている。マンションの一室で籠城しながら描いた恵の裸婦像は、「未完だが、葉村恵のソバカスまで丹念に描いたものだった」（三八二頁）と堂元は記している。脳手術後に徐々に崩壊していった成瀬純一の自己は、絵を描くという芸術行為によって、本来の自己を取り戻すことになった。それは、手術後の純一が嫌悪した恵のソバカスが描かれている、という芸術表象によって明らかになっている。

移植された他人の脳によって人間の心が支配され、本来の自己の意思とは反して殺人を犯してしまうという現実には、医療はどのようにに対応するのか。東野は、自己を形成するものが何なのかという問題提起と同時に、禁断の領域に踏み込むマッドサイエンティストたちと、水面下で彼らを利用する政府の闇の組織の問題を描き出している。

五、人格はDNAのみで決まるのか？

―『プラチナデータ』におけるDNAの操作ともう一つの自己

『変身』の中では、科学技術によって自己分裂を起こしてしまふ男の葛藤が描かれているが、『プラチナデータ』（二〇一二年発表）の中に登場する神楽龍平は、自身が二重人格であることを認識しており、反転剤という特殊な薬によってもう一つの人格を呼び出している。神楽は何等かの科学によって自分の中に潜むもう一つの人格を消すことを望んでいた。また、心は遺伝子によって決まるといふ仮説を立証しようと試みてもいた。科学のデータのみを信じる神楽と、物事の本当の姿を見極めるリュウというもう一つの自己が対比的に描かれている。

サヴァン症候群として治療を受ける蓼科早樹とその兄が、研究を行っていた新世紀大病院で殺された。早希は数学に特殊な能力を発揮し、国民の遺伝子情報をもとに犯人を特定する捜査システムを作っていた。神楽龍平という研究員は、このDNA捜査システムで犯人の検挙に貢献していたが、この兄妹殺害の犯人と思われる毛髪のDNAから出された結果が、神楽自身の名前であった。そこから神楽の逃亡劇がはじまる。¹³

神楽自身には蓼科早樹に接触した記憶がないが、彼女の遺体になぜ神楽の毛髪がついていたのか？神楽が逃亡を試みたのは、神楽自身が犯人である可能性を否定できないからでもあった。新世紀大病院の水上海二郎教授のもとで反転剤を用いて二重人格の

コントロールを行っていた神楽は、自身のもうひとつの人格である「リュウ」の記憶をもっていない。自身が気絶をしているときに、リュウが蓼科兄妹と接触した可能性を捨てることができなかつたため、データのみを信用する神楽は、何とかリュウの行動を把握しようとする。

蓼科兄妹が作り出したDNA捜査システムには、NOT FOUNDという結果にいたることもあった。蓼科兄妹が殺害される直前には、銃を用いた連続殺人事件が起こっており、十三例の未確認の結果がでていた。その犯人の名は、NF13と呼ばれていた。蓼科兄妹が殺害された銃はおそらくNF13が使用したのと同じものであるとみられていた。DNA捜査システムでも犯人が特定できないのは、データ不足が原因であるのではなく、支配者側が意図的にシステムに探知されないように細工をしていたことが小説の終盤で明らかにされる。これが俗にいう「プラチナデータ」であり、このデータに登録さえしていれば、DNA捜査システムから特定の人物たちが検出されないことになっている。国民全体にDNA情報の登録に協力させておきながら、国会議員や警視庁上層部の者などの特権階級の人々が、彼ら自身や彼らの親族が逮捕されない仕組みをつくりあげていたのである。蓼科兄妹は不完全なシステムを補うプログラムである、通称「モーグル」をほぼ完成させており、それをめぐって殺害されたことが物語の中盤で明らかになる。

神楽のもう一つの人格である「リュウ」は、科学やデータを信用していない。リュウの目に映るものは、彼自身が見たいと思う

ものでできている。リュウが見ようと試みる世界は、神楽本人とはまったく対照的な世界である。リュウは、神楽が反転剤をしよした後の数時間、特別室でただひたすら絵をかくて過ごす。リュウは、「スズラン」と自称する少女を絵のモデルとして描いていた。後に明らかになるが、このスズランという少女の正体は、殺された蓼科早樹であった。¹⁴

蓼科早樹と、スズランという少女の外見とは全く異なっていた。リュウは、蓼科早樹と接する際に、彼女の外見——顔に大きな痣があり、脂肪の重みで脛が垂れ下がりをたると頬に吹き出物があるような醜い姿——ではなく、彼女の内面のみを見ていた。そして、リュウの目に映る蓼科早樹が、スズランという幻影としてリュウの前に現れていた。リュウは、自身に与えられるわずかな時間をスズランだけと過ごし、絵を描くことだけに費やした。描くのはスズランの姿と、今は亡き陶芸家の父の手の絵のみ。逃走中の神楽が聞いた際にスズランが語るところによれば、リュウは目に映るものではなく自身が見えるものしか描かない。それは神楽にはみえないものである、という。¹⁵

作品の最後には、NF13の正体が水上教授であることが明らかになる。水上は、電気でトリップ状態を起こす機械（通称電トリ）の実験に精を出していた。この電トリを改造したハイパー電気トリップ機（通称ハイデン）を使えば、脳を電気で刺激することができ、恍惚状態になる。だがこれは、いつ事故死につながるか危惧されるような危険な機械であった。水上はこのハイデンを更にパワーアップさせ、電気で脳を刺激してトリップ状態を激し

くした上で、強力な催眠状態に陥らせ、どんな人間も従順になるように仕向けようとした。さらに悪いことに、このハイデンは、通常の電トリとは異なり、中毒症状を引き起こすという代物だった。水上自身は研究者としてハイデンの効果を試したいと考えた。ハイデンでトリップ状態になりたいという、電トリに溺れている女性たちを実験的に使用し、その結果、彼女たちを死に至らしめた。水上は、脳科学者の犯行であることを隠すために、死体を犯し、自身の精液を残しておいた。水上はその地位を利用してプラチナデータに自身の情報を登録していたため、通常のDNA捜査システムには決して引っかけからず、水上が犯人として特定されることは決してない。人の心を操る方法をためてみたかったのだ、と水上は豪語する。連続殺人の犯行を隠蔽していた水上だが、モールのプログラムを開発した蓼科兄妹によってプラチナデータの存在が明らかになることで自身の犯行が明るみになることを恐れ、兄妹を殺したというのが、蓼科兄妹殺しの真相であった。蓼科早樹がスズランとしてリュウの部屋を訪れた際に彼女の毛髪が神楽の衣服に付着し、水上はそれを利用した。プラチナデータの存在を知らずに、蓼科兄妹とともに作り上げたDNA捜査システムを妄信的に信じていた神楽は、自身が作り上げてきたプログラムの罠に陥ったのである。

科学技術と天才数学者が絶対的なシステムを構築したかのように見える捜査方法が、科学に妄信的になった研究者と、彼らを利用しようとする権力者によって、意図的にゆがめられてしまう。科学という武器が正しく使われない場合に引き起こされる悲劇、

そして、その武器を利用しようとする支配者たちが、やがて自らをも破壊させてしまうことが、様々な謎解きと絡めて描き出されている。

結

東野は『禁断の魔術』（二〇一二年発表）の中で、科学技術に向き合う技術者の倫理の問題を問うている。

この作品の中で、物理学者の湯川学は高校の後輩の古芝伸吾に、高校の科学部の新入部員勧誘のためのデモストレーションとしてレールガンのノウハウを教える。¹⁶

湯川との実験の中で科学の楽しさに目覚め、自身も研究者を目指すようになる古芝だが、湯川の務める大学に入学した後に、ただ一人の家族である姉を亡くす。早くに死んだ両親に代わって古芝に対して経済的な援助をしていた姉の死には姉と不倫関係にあった代議士が関係していた。この代議士は、姉との不倫関係が明るみになることを恐れ、ホテルの一室で出血多量になった姉を残して逃亡した。処置が早ければ姉は死にはいたらなかったことを古芝は知る。この代議士に復讐を果たそうとした彼が選んだ復讐の武器は、湯川にノウハウを教わったレールガンであった。通常のレールガンを、人を殺すレベルまでに改造した古芝は、この改良されたレールガンで代議士の殺害を計画する。湯川が夢を与えた科学は、強い憎しみと復讐心によって、殺人の武器に代わっ

てしまうことになった。古芝がレールガンで代議士を殺そうとしていることを察した湯川は、古芝が身を潜めている場所を特定し、次のように言う。

「私がここに来たのは、一言でいえば責任をとるためだ」湯川はいった。「事情はわかっている。君だって聖人君子じゃない。愛する人を見殺しにされた恨みを晴らしたいということもあるだろう。だけど思い出してほしい。レールガンの研究に没頭した時のことを。二人でどんな話をした？ 科学の素晴らしさを語り合っただろ。私は君にそんなことをさせたくて科学を教えたんじゃない」

伸吾は俯いた。返す言葉などなかった。

しかし、と湯川は続けた。

「無理に断念させようとは思わない。君がどうしても思いを遂げたいというのなら力を貸そう。君にそのレールガンを作らせたのは私だ。だから私が決着をつける。撃ちたいと思うなら、そういつてくれ。代議士の頭部が照射器に入った瞬間、私はプロジェクトイルを発射する」

〔禁断の魔術〕二八五頁

レールガンを作るノウハウを教えた湯川は、武器となりうる技術を高校生の少年に教えたことを悔いると同時に、古芝に科学の本当の意味を悟らせようとする。湯川は、姉から聞いた、技術者としての古芝の父親の話をする。軍需産業に携わる会社で働いていた古芝の父親は、対人地雷の製造を行っていた。地雷は武器の一

つで、戦争がなくならない以上、武器は必要だという程度の認識だった父親は、あるとき、地雷で両足が吹き飛ばされた子供を目にする。父親は、自らの大きな過ちに気づき、「研究者としての残りの人生を、過ちを正すことに使いたい、と考えた」（二九一頁）という。この話を古芝は知らなかったが、技術者の父親が何度も「科学を制するものは世界を制す」と繰り返していたのを覚えていた。湯川は次のように続ける。

「科学を制する者は世界を制す」一言一言を噛みしめるように湯川がいった。「核兵器や地雷を思い浮かべた時。この言葉は全く別の意味を持ってしまう。お父さんは自分自身への戒めとしても、この言葉を忘れないようにしていたんだ。」

（『禁断の魔術』二九一頁）

研究者としての父親の信念を知った時、古芝は自身の科学の使い方への過ちに改めて気づく。父の無念を無駄にしてはならない、父の信念を受け継がなければならない、と考えた古芝は、代議士殺害を断念する。それまでに知らされなかった、科学者としての過ちと後悔をとまなう父の過去を知った古芝は、自身と同じ血が流れている父と同じように、科学に対して真摯に向き合うことで、父と自分との絆を再確認した。古芝の自己は、父と同じ技術者の正しい姿勢によって取り戻された。

マッドサイエンティストと自ら認識する科学者が多く登場する東野作品の中で、湯川学という学者は、科学の未来に夢を託し、

科学が世界をよくすると純粋に信じている。それと同時に、その科学を発展させることの責任に対しても、常に真摯に向き合う研究者として描かれている。

序で述べたように、推理小説の作法としては、高度な科学技術をトリックとするのは禁じ手でもあった。技術者という経歴を経て小説家に転身した東野だからこそ、科学がもつ力の可能性をトリックとして最大限に利用し、それでも尚、科学がもたらす負の遺産にも人間は責任を負わなければならないことを東野は警告する。そして、その科学が特権階級に利用されることへの脅威も併せて提示している。そこには、科学の意味を曲解してしまったマッドサイエンティストを利用しようとする政治的圧力が存在する。実験台になってしまった一般市民は、自己を失い、さまざま。この政治的圧力は、ときには自死という悲劇も産むこととなる。

東野が描く科学は、あくまでフィクションの世界のものだ。しかし、マイナンバーカード保持の義務化が検討されている日本の未来は、『プラチナデータ』で描かれているような、遺伝子を登録せねばならない事態も起こりうるのではないか。

利便性を追求する世界で求められる科学技術は、自己の喪失や崩壊という負の結果を伴う。また、そのような科学技術は、一部の権力者によって政治的に利用されたり悪用されたりする恐れもある。この悪用によって失われてしまった個々の自己は、歪められた科学によって取り戻すことができない。東野作品の中では、時に、妄信的な研究者が発達させてきた科学と、絵画をはじめとする芸術とが対極に置かれることがある。そして、失われた自己は、

目に見えないものを見ること、さらに、物事の本質を見抜くことを主眼とする芸術によって取り戻される。

推理小説の掟を逸脱した東野のミステリは、誤った科学技術を利用する闇の組織の危険性を訴えると同時に、経済効果や時間的効率のみを重視するあまりに芸術が軽視されることへの警告ともなっている。

註

(1) この論文に登場する科学技術や実験は東野圭吾による創作であり、フィクションである。だが作家に転身する前にデンソーの研究者として働いていた経歴を持つ東野は、科学技術に対する取材を行いながら、自身の技術の知識を採り入れている。また、東野は単行本を文庫化する際に改変することもあるため、作品の引用は、すべて文庫版に拠る。

(2) 東野は原発や核燃料をめぐる問題を作品に織り込むことが多い。例えば、二〇一三年発表された、『祈りの幕が下りる時』の中に登場する原発作業員は、身分の保証がなくても原発処理員の職にはありつけると述べ、自らを、様々な原発を渡り歩いて生活する「原発渡り鳥」と自虐している。東野はこの作品で、効率を重視するために被爆程度の安全基準が守られない原発の処理現場の問題を浮き彫りにしている。また、東日本大震災より前の一九九五年に発表された『天空の蜂』は、

日本全国の原発をすべて止めなければ原発の上にヘリコプターを落とすというテロを犯人が予告する設定になっており、日本国内でも原発の停止を求める動きが盛んになった震災後、二〇一五年に映画化されている。

(3) 江戸川乱歩・松本清張共編『推理小説作法』収録の荒正人「推理小説のエチケツト」を参照。『推理小説作法』一四〇—一七二頁。

(4) 東野作品の中でも、密室トリックが使われ、本格ミステリに分類されるものもある。東野の初期作品として発表された、『十文字屋敷のピエロ』『仮面山荘殺人事件』『ある閉ざされた雪の山荘で』などがこれらに含まれる。

(5) 『名探偵の掟』には「密室宣言—トリックの王様」「意外な犯人—フーダニット」「屋敷を孤立させる理由—閉ざされた空間」「花の〇L湯けむり温泉殺人事件」論—二時間ドラマ」などの章があり、この作品に登場する警部の大河原番三は、名探偵天下一大五郎が自身の推理を展開して「犯人はあなただ」という状況を茶化している。探偵の天下一大五郎自身も

「密室の謎解きなんて・・・ああやりたくない。またミス
テリマニアや書評家に馬鹿にされる」天下一はおいおい
泣き出した。
『名探偵の掟』一九頁

という具合に、読者がもう飽きているような密室宣言がいか
に茶番かを滑稽に描いている。このエピソードでは、天下一

の密室の謎解きを、集められた関係者は全く聞いておらず、好き勝手な行動を始めてしまう。この短編は大河原が語り手であるが、読者の反応をたえず意識して探偵としてのふるまいを天下一に助言をしたり、天下一を道化として茶化したりする描写を行っている。また、作者の東野は『東野圭吾公式ガイド』に収録された『名探偵の掟』の解説で、かつて鉄則とされた探偵小説の掟やトリックについて自身は既に失望しており、それらを茶化す描写をこの短編小説で行って以降、鉄則とされた推理小説の掟から抜け出して新たな試みも行っているという旨を述べている。『東野圭吾公式ガイド』六五頁。

(6) クローン技術をめぐる問題については『カツコウの卵は誰のもの』の中でも描かれている。

(7) 脳の手術とその実験をめぐる問題については『危険なビーナス』の中でも問題提起されている。この作品の中で東野は動物実験に誓われる猫の悲惨な様子を描き、動物実験の残酷さも批判している。また、脳手術が成功し、被験者が予知能力をもつようになったいきさつを『ラブラスの魔女』で描いている。この作品は、脳手術は成功したが、被験者のうちの一人がその予知能力を殺人に利用しようとしているという設定がなされており、脳という臓器にメスを入れることの是非を東野は問うている。

(8) 『宿命』は、二〇〇四年に、若松節朗監督、佐伯俊道脚本でテレビドラマ化されている。小説では美佐子と勇作の語りで進

行していくが、ドラマでは瓜生晃彦の視点で物語が展開していく。人体実験を行った記録は「脳式心動操作法の研究」として残されているが、かつて行われた実験は小説で描かれたように、人間をスパイとして操るためではなく、うつ病などの精神疾患の治療に役立てるものとして行われたことになっている。また、須貝殺しにおいて犯人と瓜生晃彦の役割に多少の変更が加えられている。

(9) 『パラレルワールド・ラブストーリー』は、森義隆監督、一雫ライオン脚本、AOL Pro 制作で二〇一九年に映画公開されている。小説と同じように、世界1と世界2が交互に描写されていくが、世界1での智彦の研究の詳細や、世界2で崇史がチンパンジーを使った動物実験を行っている様子は描かれていない。また、世界2の中で智彦が記録した論文が持ち去られたり、崇史と智彦が連絡の取れない事態に陥ったりしている様子も省略されている。映画版では、智彦と崇史、真由子の三角関係に焦点が当てられている。

(10) 東野はこの作品の制作経緯について、「もし右脳と左脳のどちらかだけが他人の脳になったら、いったいどうなるんだろう」と不意に思ったことから、この作品の発想を得たと語っている。『東野圭吾公式ガイド』三九頁。

(11) 『変身』は、佐野智樹監督、よしあだあつこ脚本、スーパービジョン制作で二〇〇五年に映画公開されている。映画では、強盗が入ったのが不動産屋ではなく、宝石店に変更されてい

る。また、京極の脳に支配された純一の変化の様子は描かれているものの、職場での暴力事件や、純一が橘直子を殺すまでの二人のやり取りは省略されている。

(12) 小説の終盤では、脳の死と人の死についての問題提起もなされている。人の死と脳死について、医師の堂元は次のように思いを巡らせている。

我々には新たに大きな宿題が与えられた。それは人の死とは何かということである。成瀬純一ことを極秘に処理しなければならぬ理由は、ドナーが京極という犯罪者であったことや、結果的に純一を不幸にしまったことだけではない。むしろこれらは些細なことなのだ。

最大の問題は、脳片という小さな塊に過ぎないにも拘わらず、京極が生き続けていたということだった。心臓死の判定がなされ、脳波は停止したが、彼は生きていたのである。確かに脳細胞のひとつひとつが死んだわけではなかったし、だからこそ移植も可能だったのだ。

すると人間に死の判定などできないのではないのか。我々が知りうるかぎりの生命反応がすべて消えたとしても、人間は密に、まったく想像もしない形でできているかもしれないのだ。

『変身』三八一頁

また東野は、脳死や移植手術にともなう倫理について、『麒麟の翼』や『人魚の眠る家』の中でも問題提起をしている。これらの作品の中では、脳死状態にありながらも生命維持を

しようとする家族の姿を描き、特に未成年の臓器移植の問題についても問題提起がされている。

さらに、東野は医療に伴う倫理や医療ミスの問題についても取り上げることが多い。『使命と魂のリミット』の中では、医療ミスを公表しなければ病院を破壊するという強迫がなされた犯罪を扱っている。

(13) 『プラチナデータ』は大竹啓史監督、浜田秀哉脚本で二〇一三年に映画化された。この映画版では、大胆な設定の変更が行われている。未確認の連続殺人犯(NF13)の正体を男性から女性へと変えられている。小説の中では、犯人は銃で被害者を撃ち、被害者女性の体内に精液を残すという手段をとっている。DNAシステムが正常に稼働すれば、この精液から犯人が割り出せると警察はにらんでいるものの、全く捜査が進まない。映画版では、NF13による犯行の跡として、被害者の肋骨が一本引き抜かれているという共通点があげられている。この女性の犯人は、創世記の中で、神がアダムの肋骨を一本抜き取りイブという女性を作ったことに言及し、DNAシステムや遺伝子を操ることができる科学者たちは、神のような存在になれると妄信的になっている。

(14) スズランという存在は、映画版には一切出てこない。小説ではリュウを呼び出そうとした神楽のもとに、すぐにスズランがやってくる。リュウはスズランを後ろに乗せてバイクを走らせたり、電車の中で彼女と会話をしたりする。小説では、

最終的に、スズランはリュウの幻覚であったことが、志賀孝志によって神楽に説明される。スズランは実在しないために監視カメラにも映らないこと、いないはずのスズランと会話をする神楽に対して電車で居合わせた人々が不審な目で彼をみることで、スズランが存在しないのではないか、という疑問を読者に湧かせるようになっていく。

(15) リュウは神楽とは利き手を変えて絵を描く設定になっているが、序で言及した『名探偵の掟』の中の「意外な犯人―フーダニット」の章で、探偵の天下一は、殺害された老人の「もう一つの人格」の犯行(すなわち自殺)という理論を展開する。病氣治療のためにある脳手術を受け、右脳に別人格が生まれ、その人格が絵を描いていた。被害者は右利きなのに、絵筆には左手の指紋がついていたと説明する。これは自殺とは根本的に違う、殺人である、と天下一は言い張る。警部の大河原は、御見それしましたとばかりに天下一の推論を絶賛するが、どこからかビールの空き缶やら、バナナの皮、生ゴミが飛んでくる。「読者だ、読者が怒って投げつけてきてるんだ」(『名探偵の掟』五六―五八頁)と大河原と天下一は逃げ出す。『変身』では、別人格になったリュウが意図的に利き腕をかえて絵を描いている。この設定を東野は自身で皮肉っているところもできる。

(16) 東野作品のなかでも科学をトリックとして用いた作品群として、『探偵ガリレオ』『予知夢』『虚構の魔術師』『ガリレオの苦悩』

など、天才物理学者・湯川学が探偵役を務める、ガリレオシリーズがある。このシリーズはテレビドラマ化され日本のエンターテインメント界で広く知られるようになった。また、そのシリーズのひとつである『容疑者Xの献身』の原作で東野圭吾は直木賞を受賞し、この作品は、日本人によって書かれた推理小説として初めてアメリカのエドガー賞の候補ともなった。

参考文献

- 江戸川乱歩・松本清張共編『推理小説作法』(二〇〇五年、光文社文庫)
木々高太郎・有馬頼義共編『推理小説入門』(二〇〇五年、光文社文庫)
日本推理作家協会編『ミステリーの書き方』(二〇一〇年、幻冬舎)
東野圭吾『十字屋敷のピエロ』(一九九二年、講談社文庫)
東野圭吾『宿命』(一九九三年、講談社文庫)
東野圭吾『変身』(一九九四年、講談社文庫)
東野圭吾『仮面山荘殺人事件』(一九九五年、講談社文庫)
東野圭吾『ある閉ざされた雪の山荘で』(一九九六年、講談社文庫)
東野圭吾『名探偵の呪縛』(一九九六年、講談社文庫)
東野圭吾『パラレルワールド・ラブストーリー』(一九九八年、講談社文庫)
東野圭吾『天空の蜂』(一九九八年、講談社文庫)

- 東野圭吾 『名探偵の掟』(一九九九年、講談社文庫)
 東野圭吾 『探偵ガリレオ』(二〇〇二年、文春文庫)
 東野圭吾 『予知夢』(二〇〇三年、文春文庫)
 東野圭吾 『たぶん最後のご挨拶』(二〇〇七年、文藝春秋)
 東野圭吾 『容疑者Xの献身』(二〇〇八年、文春文庫)
 東野圭吾 『使命と魂のリミット』(二〇一〇年、角川文庫)
 東野圭吾 『ガリレオの苦悩』(二〇一一年、文春文庫)
 東野圭吾 『ブラチナデータ』(二〇一二年、幻冬舎文庫)
 東野圭吾 『カッコウの卵は誰のもの』(二〇一三年、光文社文庫)
 東野圭吾 『麒麟の翼』(二〇一四年、講談社文庫)
 東野圭吾 『虚構の魔術師』(二〇一五年、文春文庫)
 東野圭吾 『禁断の魔術』(文春文庫、二〇一五年)
 東野圭吾 『夢幻花』(二〇一六年、PHP文庫)
 東野圭吾 『祈りの幕が下りる時』(二〇一六年、講談社文庫)
 東野圭吾 『人魚の眠る家』(二〇一八年、幻冬舎文庫)
 東野圭吾 『ラブラスの魔女』(二〇一八年、角川文庫)
 東野圭吾 『危険なビーナス』(二〇一九年、講談社文庫)
 東野圭吾 作家生活三五周年実行委員会編 『東野圭吾公式ガイド』
 (二〇二〇年、講談社)

(まつもと まい、広島大学大学院人間社会科学科研究科助教)

In Search of the Lost Identity: Keigo Higashino's Crime Fiction and the Forbidden Science

Mai MATSUMOTO

Key Words: Keigo Higashino, Crime Fiction, Science, Identity

There are several rules in crime fiction that authors should be followed. Ronald Knox (1888-1957), an English author who suggested 20 rules for crime fiction, argued that the authors of crime fiction should not describe the crimes using advanced science and technology that are beyond reader's comprehension. He added that there should not be no romance element in crime fiction. Moreover, he insisted that crimes could not be committed by a political party, and crime fiction authors should make every effort to describe using the limited description to show the characters.

Conversely, Keigo Higashino (b. 1958), one of the most popular authors of crime fiction in Japan pursues for a new form of crime fiction by breaking these rules. In his works, the author tries to show the characters related to the case may engage in self-exploration in the process, asking 'Who am I?'. Therein lies the human challenges and conflicts with science and technology, as well as the shadowy political organizations that manipulate them.

I focus on several characters in Higashino's works, in this essay, especially instances where the crime is perpetrated by a scientist. Moreover, I show character's identities who seek their lost selves through the resolution of the questions, 'Who has done the crime?' and 'Why has he/she done the crime?'.